

「からだ」を知り、「こころ」に触れ、「いのち」を感じる——

からだこころの発見塾は子どもたちの、そして私たち大人の、生きる力をはぐくみます

# からだこころの発見塾

●ニューズレター VOL. 2

●連絡先

NPO法人 からだこころの発見塾

〒104-0051

東京都中央区佃1-11-6 RPT809

TEL : 03-6666-7803

FAX : 03-6219-2699

E-mail : hakken@123wb.jp

2008年9月23日発行

## 伝えたいことを明確にし、 生徒の関心をつかむ——プレゼン大会

発見塾は、「からだ」を知り、「こころ」に触れ、「いのち」を感じる機会を提供するため、講演活動やサイエンスカフェ、ネットワーク形成などを行っています。特に講演は、学校などからの要請も多く、これまで20件あまり実施してきました。しかし、講師が互いの講演の様子をみる機会はありません。そこで、講演のブラッシュアップ、会員相互の情報交換や新たな講師の発掘を狙い、昨年と今年の2回、「大プレゼンテーション大会」(以下プレゼン大会)を実施しました。

第1回の開催は2007年11月23日。持ち時間は1人20分、理事のほかに3名の発表がありました。まずは日本消費者生活アドバイザー・コンサルタントの坂本憲枝さんが、自らが相談を受ける若者の実態と大人の責任、どうしたら自立する若者を育てられるかなどを熱く語りました。朗読ユニットK&Yクルーズを主催する堀内由香さんは、さすがアナウンサー、その語りに「もっと読んできかせて！」の声も。間の取り方、発声など参考になることがたくさんありました。日本二分脊椎症協会の鈴木

信行さんは、学校での講演活動を数多くこなしているだけに、はっきりした声でわかりやすいプレゼン内容でした。

第2回は2008年2月17日に「いのちの授業」をテーマに開催。発見塾のアドバイザー的存在で、いのちのブックトークを10年以上続ける種村エイ子さんがいのちの授業のアプローチの仕方を披露。ホスピス医で、学校での講演活動をする小澤竹俊さんも「いのちの授業」の進め方を紹介しました。和歌山県の佐藤律子さんは、がんと向き合った息子さんから得た宝物を語り伝えることでいのちの大切さを訴えました。神奈川県藤沼直美さんは、保育士として母としてのいのちの重さを伝える日々を語りました。手法こそ違いますが、皆の願いはひとつ——「いのち

息子さんの手紙の一文を紹介する佐藤律子さん



### ●プレゼン大会の発表者と演題●

第1回 2007年11月23日

1. 堀見洋継さん「発見塾の紹介」
2. 鈴木信行さん(日本二分脊椎症協会)「みんな違っていいんだよ」
3. 坂本憲枝さん(消費生活センター)「勧誘を断れない若者」
4. 薬師寺道代さん「いのちの授業の実践から」
5. 石井保志さん「からだといのちの図書コーナー」
6. 堀内由香さん(朗読ユニット・K&Yクルーズ)「読み聞かせの実践」

第2回 2008年2月17日

1. 小島あゆみさん「からだこころのサイエンスカフェ」
2. 鈴木信行さん「四街道中の講演をして」
3. 種村エイ子さん『ブックトークによる「いのちの授業」』
4. 佐藤律子さん「いのちの語り手登録バンク」
5. 小澤竹俊さん「ホスピスから学ぶいのちの授業」
6. 薬師寺道代さん「いのちを語るとは」
7. 藤沼直美さん(神奈川県太田和保育園保育士)「命のはじまり」  
(発表くださった方、ありがとうございます)

を大切にしてほしい」。その想いを改めて実感しました。

(文責 事務局・久保園由美子)

## 自分の心身を捉え直すための 「おとなのからだ塾」開催

「第1回 おとなのからだ塾」は、6月14日(土)中央区NPO・ボランティア団体交流サロンで開催されました。講師に演出家・作家で、大学で身体表現法を教える吉岡友治さんを迎え、「からだと言葉のあり方に気づく」をテーマにひとときを過ごしました。

参加者は男性4人、女性11人。まず、吉岡さんは、「並んで隣の人に触れてみて」と語りかけました。手を握る、指先を肩に載せる、服をつかむ、肩を抱くなど2

人の関係性が出て、面白かったです。2人向き合っただけの「手に触れない腕相撲」では、相手の様子をよく観察し、呼吸を合わせることの大切さがわかりました。

後半は言葉を使わない「2人劇」。合図とともに振り返っての「出会い」は、緊張感と爆笑の連続。場を取り繕おうと、男性のほう在必死で動く傾向が見られ、人との関係は案外「言葉」によって交わされる約束事で成り立っていて、それを封印すると「何かしなくては」という

手に触れないで腕相撲するのは初体験。動きに演劇的な要素が少し入ると、人との関係、ものの見え方が変わるよう



プレッシャーから、普段はしない行動をするものだという事を実感しました。これこそ「百聞は一見に如かず」で、実際に体験していただくのが一番です。次回のテーマをご提案いただければ幸いです。

(文責 小島あゆみ)